

死の尊厳を取り戻すために一人の死に向き合う職業人のための教育研修プログラムの確立

背景

核家族化の進行により、若年者と地域社会とのつながりが希薄となり、葬儀の縮小化も進み、先人たちから学ぶはずの地域の風習が継承されず、「死者」への向き合い方を知らない若年者が増えている。そのため「死」をめぐる倫理観や宗教観を実感する機会が与えられず、死者に対する畏怖の念も薄れ、「ご遺体」の取り扱いに関する作法も伝わりにくくなっている。それは、例えば担当している患者さんが亡くなり、そのご遺族と対面する際に、誤ったふるまいにより感情を逆撫でしてしまうなどの問題として顕在化している。こういった問題は医療関係者に限らず、列車への飛び込み事案に対応する鉄道会社職員、事件現場に駆けつける警察・消防職員などでも同様に浮上している現代社会の普遍的問題であるといえる。

目的

これまで“地域の風習”など不文律によって慣習化していた「死者」に対する接遇方法を明文化し、業務として「死」を扱う医療機関、行政機関（警察、消防など）、民間企業（葬祭業、運輸業など）を対象に、「ご遺体」および「ご遺族」と向き合うために必要な知識や作法を身につけるための教育・研修プログラムの確立を目的とする。

研究計画と方法

医学部におけるご献体の取り扱いに関する教育方法の検討：

医学部では医師を目指す若者に、「解剖実習」の中でご遺体（ご献体）に対する接遇方法を教育する。身近な人の「死」の経験がない医学生も多く、どのように「死」を教えるのか、医学教育における我々の責任は重大である。献体を希望される方のお話や、献体登録に関する一連の事務手続き、実際にお亡くなりになってから、解剖実習で学生が対面するご献体になるまで、さらには解剖実習終了後の納棺・火葬からご遺族へご遺骨を返還するところまで、一つ一つ個人情報保護には十分留意して写真や動画、献体者より生前いただいたお手紙などを含めて教育用資料としてまとめる。

岐阜大学医学部2年生が全員必ず受講する人体構造学コース（解剖学コース）内で、この教育用資料を用いた講義を行い、解剖実習に臨んでもらう。講義受講前と解剖実習後に学生へアンケート調査を行い、「死」に対する考え方に変化が生じたか検証を行う。



医学部医学科の教育用資料として使用